

研究ノート

A. Giddens 後期近代論を人々の振舞の次元で考える
—振舞のコードとしての authenticity について—谷原 吏ⁱ

対人関係が上手／下手であることが、社会における包摂と排除の基準としてますます強く機能するであろうこれからの時代を見据え、対人関係を取り巻く規範を描き出し、「何が起きているのか」を明らかにすることは喫緊の課題である。本稿では、A. Giddens の後期近代論と、感情の社会史研究を架橋することにより、後期近代における「対人関係を取り巻く規範」の機制に接近することを試みる。その際、「社会的に要求されたものと禁止されたものの標準」(N. Elias 1969=1977: 59)としての「振舞のコード」に着眼する。思考の出発点として、Giddens が後期近代における道德規範として挙げた authenticity (ほんもの) という概念を利用する。まずは、関連する先行研究を通じて、現代において様々な場面で authenticity の価値が上昇していることを指摘する。続いて、感情の社会史研究を参照しながら、19世紀の振舞のコードが respectability であったことを確認し、20世紀を通じて authenticity に重きが置かれるようになったことを確認する。その上で、respectability と authenticity の機能の相違に着目し、それを後期近代論の文脈で捉え直す。具体的には、respectability は「差異化」として機能していたことに対して、authenticity は「コミットメントの共有」を通じて、相手が信頼するに足るかどうかの判断をする際の必要条件として機能していることを指摘する。

キーワード：後期近代論、振舞のコード、respectability、authenticity、信頼

1. 先行研究及び本稿の立ち位置

A. Giddens は、他の学問分野と社会学を区別する意図から、社会学を「モダニティの再帰的分析 (the reflexive analysis of modernity)」としてとらえるということを述べている (Giddens 1998: 69=2001: 109)。本稿は、モダニティ、特に19世紀から21世紀にかけての「振舞 (behavior) のコード」に着眼することにより、後期近代における「対人関係を取り巻く規範」の変容を描こうとするものである。

現代社会においては、様々な技術や人工知能が加

速度的に発展し、人間が行う作業がますますそれらに代替されるといわれている。しかしながら、密度の高い対人関係を伴う社会性が要求される仕事は今後も人間が担い続けるという (Benedikt & Osborne 2013等)。「同調圧力」や「空気を読むこと」など、対人関係上の困難を説明する語彙が流布して久しいが、「対人関係」は、人々の悩みの源泉でありながら、その重要性は今後も上昇し続けるのである。他者と対面する場面において、人々は「どうあらねばならない」とされているのだろうか。対人関係が上手／下手であることが、社会における包摂と排除の基準としてますます強く機能するであろうこれからの時代を見据え、対人関係を取り巻く規範を描き出し、「何が起きているのか」を明らかにすることは喫

i 立命館大学大学院社会学研究科博士前期課程

緊の課題である。

本稿では、対人関係を取り巻く規範へ接近するために、「振舞のコード」に着眼する。N. Elias はマナーブックの記述の変遷に着目し、「文明化」の過程を描き出した。彼によると、振舞のコードは「社会的に要求されたものと禁止されたものの標準」(N. Elias 1969=1977: 59, 傍点は引用者)であり、対人関係における秩序を維持している重要な要素である。人々は社会生活を送る上で、他者と接し、関係を築く。その際、言葉や行動で相手にメッセージを送ったり印象付けたりする。検討せねばならないのはこの behavior の次元で機能するコードである。相互行為における秩序を維持するために、人々は日々「適切に」振舞うことを迫られている。このことを共時的に観察した E. Goffman は、適切な相互行為秩序から逸脱することは、精神病質であるとみなされることにすらつながると指摘している (E. Goffman 1963)。また、後述するように、家柄や肩書等の外部的基準の権威が薄れてくる後期近代においては特に、振舞の次元ではたらくコードが、対人関係の規範を示すシグナルになり得ると考えられる。

本稿は、この「振舞のコード」を、Giddens の後期近代論の視座から捉え直すことをねらいとする。その際、感情の社会史¹⁾を描いた P. Sterns (1994) 及び C. Wouters (2007) 両者の仕事を主として参照する。分析の視角としては、現代の道徳規範として Giddens が挙げている authenticity という概念に着目し、その具体的な現れ方や機能を分析する。authenticity という概念は、Giddens の著書の中で何度か触れられているものの (Giddens 1991=2005 等)、詳細な分析は行われていない。本稿では、関連する先行研究を参照することにより、この authenticity の内容及び機能を明らかにし、後期近代における振舞のコードの変容を描き出す足掛かりとしたい。

後期近代論とは何か、それをまずは簡単に説明しておこう。Giddens によると、モダニティ (近代) は、「時間と空間の分離」(どこにいても時間は普遍

的であり、場所に拘束されないこと)「脱埋め込みメカニズム」(貨幣等の中立的な媒介や、専門家の浸透により、相互行為が場所から切り離される)「制度的再帰性」(近代的制度は、様々な情報や知識に照らして継続的に修正を受けやすいこと)の三つで特徴づけられる (Giddens 1990: 17-45=1993: 31-63, 1991: 14-21=2005: 16-23)。近代においては、伝統や宗教はその権威を失い、あらゆるものごとは、科学的懐疑主義のもとで「追って知らせのあるまで (until further notice)」(Giddens 1991: 84=2005: 93) 正当であるにすぎず、確かさの足場はなくなっているというのである。これは人間関係にも当てはまり、かつて氏族や階級等として存在していた自分に関する (あるいは他者に対する) カテゴリーが薄れてきており、家族、友人等の関係は「純粋な関係」(血縁や地縁などの外的支柱をもたず、それ自体が目的であり実質であるような関係)²⁾の要素が強くなる。そしてこうした特徴が加速度的に進行するのが後期近代である。「自己」も「関係」もその外部に存立基盤を持たず、常に再帰的な検討に晒されるのである。

社会史家の Wouters や Sterns は、社会階級の混交や福祉国家の拡大、あるいは現代的な産業化、職場のマネジメントの科学化、健康医療の科学化など社会のプラクティカルな変化に、感情制御のレジームの変化の原因を見出した。これらはいずれも、Giddens のいう再帰的近代の特徴そのものである。例えば、社会階級の混交は、「階級」という外部的権威の希薄化であり、産業化は、地縁を離れて職業生活を送るようになる可能性を拓く。以上を踏まえ本稿では、両者の議論を Giddens の後期近代論と架橋する作業を行う。

具体的には、①20世紀後半から21世紀に見られる authenticity の希求という事象を捉えること、② authenticity に対比される前期近代の振舞のコードとして respectability という概念に着目し、Wouters 及び Sterns によって展開された感情の社会史研究を敷衍すること、③ respectability と authenticity に

ついて、その機能に着目し対比することにより、後期近代論の肉付けを行うこと、という三つの作業を行う。このことにより、かつて差異化として機能していた振舞のコードについて、その役割のウェイトが「コミットメントの共有」を通じて信頼を構築することに変わってきたことを明らかにすることを目指す。

本稿の構成は次の通りである。まず2節で、現代における振舞のコードを象徴すると考えられる authenticity の重要性を確認する。3節で、Sterns (1994) の論考を参照しながら、ヴィクトリア朝時代にルーツをもつ規範である respectability の内容及び機能について確認した後、4節では、Wouters (2007) の論考を参照しながら20世紀を通じて振舞のコードがどのように変遷したのかを確認する。5節では、残る論点である authenticity の機能を明らかにすることにより、後期近代における振舞のコードの内容及び機能の変容を読み解く。

2. authenticity に関する言説

(1) authenticity とは何か—社会学的自己論の文脈から—

まずは、Giddens が authenticity をどのように捉えていたのかを確認する。前述の通り、近代が進むにつれて人々は外部的な権威を失っていく。それでは、人々は何を基準として世界を把握し、生きていくのだろうか。Giddens によると、その時唯一の足場になるのが authenticity³⁾ であるという。近現代においては、近代以前にあったような家系等の依るべき外的基準がないために、「ほんとうの」自分とは何か、「ほんとうに」自分が欲するものとは何かということを開いて続けて自己アイデンティティを形成し、それを基準に選択を行っていく。そして人々は自分が「ほんとうに」求めていると思う人と、婚姻関係等の「親密な関係」を形成していくのだという。このことは私的関係にとどまらず、職業生活上のネットワークキングにおいても当てはまるのではないかと

Giddens は指摘している (Giddens 1998: 120-1=2001: 189-190)。そしてこの「ほんとうの」自分を探求するにあたり頼りにされるのが心理学的知見である。Giddens はこのことを、市場に流通する自動本を参照することにより明らかにしようと試みた。

続いて、現代において、この authenticity の価値がいかに上昇しているか、ということを確認する。authenticity という概念が社会的に検討されるきっかけを提供したのは L. Trilling であろう。彼の1971年の著書 *Sincerity and authenticity* 以来、その議論は多くの社会学者に引用されてきた。まずは、彼の議論を辿りながら、現代における authenticity の現れについてみていきたい。

上述の著書の中では authenticity について明確な定義をしていないが、対置された概念である sincerity との対比の中で、「社会性を剥ぎ取った生のもの」というニュアンスが込められているように読み取れる。sincere とは、「第一に建前と実際の感情との一致」(Trilling 1971=1976: 9) を指しており、次のように述べられている。

自我を演出し、自分自身を社会の舞台の上に登場させるこの営みにおいて、誠実自体が奇妙に妥協的な役割を演じているのである。社会は私たちが誠実な存在として自らを演出登場させることを要求しているが、この要求をもっとも効果的に満足させる方法は、私たちは実際に誠実であり、社会に知ってもらいたいと望む通りの人間であるように取り計らうことだ (Trilling 1971=1976: 20)。

つまり、社会から要求される役割を心から果たすことが sincere であるというのである。そしてこの「誠実」の価値は今日では低下し、「authenticity (ほんもの)」の価値が上昇してきたというのである。「文化が伝統的に有罪とし、なんとか排除しようと努めてきたものの多くが、たとえば無秩序、暴力、非合理といったものが、かえってその方がほんものなのだという理由で、少なからぬ倫理的権威を与え

られているのである。」(Trilling 1971=1976: 21)。

このトリリングの議論を出発点に、社会学における自己論の文脈において authenticity はその重要性を強調されてきた。例えば R. J. Erickson (1995) は、authenticity を「自分自身の法則によって存在していること (existing wholly by the laws of their own being) (Erickson 1995: 125)」と捉え、この30年間でその価値は上昇してきたとする。そしてその背景は、後期近代における「選択肢の多様性」にあるという。1960年代以降、血縁や共同体に基づいた自己観が希薄化し、個人は個人として大衆社会に組み込まれていく。そこでは、高度に発達したマス・メディアが、多様な他者を「在り得るべきもの」として提示し、人々はそれらとつながるようになった。消費に関してはモノの消費からサービスの消費へと主軸が転換し、モビリティが大幅に増加した。こうした中で、商品だけではなく、ライフスタイルや自己までも多様な選択肢の中から選び取っていかねばならなくなった。そしてそれらは常に「廃棄可能性の倫理 (ethic of disposability)」(Erickson 1995: 131) にさらされている。ここで Erickson が述べるのは、まさに Giddens のいう「脱埋め込み」や「自己の再帰的プロジェクト」そのものであり、こうした状況で、人々はより authenticity (ほんとうの自分) を追求するようになるのである。ここでの authenticity は、Erickson によると「自分自身の予期やコミットメントをどれくらい満たしているか」(Erickson 1995: 131) ということであり、自己の価値づけ (self-values) にとって重要なものであるという。

また日本においては、2000年代に入り、教育や産業等の様々な分野で心理学的知見を用いた言説が流布するようになった。これは、様々な社会の問題を個人の「こころ」に帰し、心理学的な知見を用いて「こころ」を分析し、問題の解決を図っていくという社会的潮流の高まりと評されている⁴⁾。前述の通り、Giddens は、後期近代の規範を authenticity であるとし、心理学的な知見がその追求を援助すると論じたが、現代日本における心理学的な言説の増大

は、それを裏付けるものとなっている⁵⁾。例えば牧野 (2012) は、日本における戦後の自己啓発本の言説史を辿ることにより、90年代後半以降において、心理学的な知見を活用して「本当の自分」を探す言説が増大したことを実証している⁶⁾。

authenticity の価値が上昇するが故に、Trilling が想定したものと徐々に離れていき、それは求められ構築されるものとなっていく。そして、「自己」にベクトルが向かっていた authenticity は、「他者」へも向かうことになる。この点を次節で説明する。

(2) 他者に対しても authenticity を求める⁷⁾

消費者は、企業が提供するものについて、ますますほんものであるかどうかを重視するようになった。正直な人からほんものを買うことを望んでおり、いかさま師からにせものを買うことを望んではいない。つまり、人々は、にせものか、ほんものかで、経済価値を判断するようになってきているということだ (Gilmore and Pine 2007=2009: 1)

この一節は二人の経営者が経営戦略書の中に書いた一節であり、学術的に洗練されたものではないが、消費社会における「ほんもの」の追求が端的に表れている。こうした傾向は、職場における対人関係の研究の成果からも支持される。

S. Cote (2013) は、中古車セールスにおける交渉の場面における「怒り」の効果を実験により実証した。その際注目された概念が authenticity である。実験協力者に、怒りが authentic である場合とそうでない場合を演じ分けてもらい、それが交渉結果に与える効果を検証したのである。その結果、バイヤーが authentic でない怒りを表出した場合、感情を表出しなかった場合と比べて、相手はよりディマンディングになり、authentic な怒りを表出した場合は、逆の結果をもたらすというものであった。Cote はこの結果について、相手が authentic な場合、より交渉に真剣に取り組んでおり、信頼できると評価するがゆえに、双方にとって良い結果をもたらすのでは

ないかと説明する。また、A. Grandey et al. (2005) は、ホテルのカウンター及びレストランの接客場面を想定した実験を行い、authenticityの重要性を明らかにした。前者の場面では、authenticな笑顔は、顧客にフレンドリーな印象を与え、また実務上のミスがない場合は、顧客満足にも影響を与えた。後者の場面では、仕事のパフォーマンスや忙しさに関わらず、authenticな笑顔が顧客満足に直接の影響を与えた。こうした事例は、authenticityが、現代の消費社会における「付加価値」として機能していることを示す。対人関係において、authenticityが求められ始めている兆候があるのである。

またこの他にも、文化現象としてのメモリアル(誰かの死にまつわる記念碑等)(McCarthy 2009)、セラピーグループ(Holden and Schrock 2009)、ツアリズム(Noy 2009)等においても、経験を共有するための媒介としてauthenticityが機能しており、authenticityはアクターによりさまざまに構築されていくものであるという研究蓄積がみられる。

以上のように、「社会性を剥ぎ取った生のもの」「ほんとうの自分」というニュアンスから出発したauthenticityは、いつの間にか追及されるものとなり、追求されるが故に必然的に、人々が構築するものとして扱われるような言説が流布しはじめた。

ここまでのところで、現代社会における振舞のコードを構成する要素としてauthenticityという概念を記述できることを確認できただろう。このauthenticityの特性を浮かび上がらせるために、次節以降では19世紀から20世紀にかけての振舞のコードの変遷を確認する。

3. ヴィクトリア朝時代の振舞のコード

— respectability と差異化 —

19世紀から20世紀初頭の振舞のコードのキーワードとなる言葉は、respectabilityである。佐藤(1998: 76)によると、respectabilityは、「狭義には、ヴィクトリア朝時代のイギリス市民社会で使われた価値基

準」である。そしてこのrespectabilityは、その時代における規範的な人間が、異なる階級や人種から自分たちを差異化するために用いた概念であると考えられている。Oxford Learners' Dictionaryによるとrespectabilityとは「the fact of being considered socially acceptable」、つまり「社会的に受け入れられた」状態であると考えられるが、その内容はどのようなものであったのか、Sternsの研究を紐解きながらみていこう。

アメリカを対象国として展開されたSternsの研究によると、19世紀には、20世紀にはなかったような身体や性への厳しい抑制があり、また19世紀前半には、激しい感情を抑制しようという風潮は強かったが、これは一面的な見方でもあるという(Sterns 1994: 15-25)。19世紀後半になると、闘うための勇氣(courage)や怒り(anger)、大切な人を喪失した哀しみ(grief)、母性愛(mother affection)、男女の愛情(love)といった内的感情の高まり(intensity)は肯定的に扱われていたという。Sternsはこのことを、子どもの死への哀しみや、愛しい人に会えない切なさをおおらかに表現している個人の手記や手紙等から精緻に立証していく⁸⁾(Sterns 1994: 29-42)。

さらにSternsは、当時の振舞のコードに二つの区分線を引く。それは、家庭内でのコードと家庭の外(主に仕事の場面)のコード、またそれにオーバーラップして、女性に対するコードと男性に対するコードである。例えば怒りについて。当時の育児指南書によると、家庭内では、平穏な母性愛が規範になっており、怒りや恐怖を通じて子供をしつけるのは良くないこととされた。一方、職場等で「適切に方向づけられた(channeled)」怒りの表出は、「目的の達成のために有用」として肯定された。そしてこれはそのまま、女性と男性とでは規範が異なることにつながる。それに対し20世紀においては、特にネガティブな感情については抑制(aversion to intensity)することが肯定された。それは有用であるとすら考えられなくなったというのである。背景としては、産業化の進展により、感情を抑制して生

産性を上げるという科学的言説や、激しい感情は健康に有害であるという科学的言説が流布し始めたことが挙げられている (Sterns 1994: 133-8)。

続いて *respectability* の機能について見ていこう。Sterns は、多くの感情の社会史研究は中産階級のそれに焦点をあてており、自身の研究も「その例外ではない」(Sterns 1994: 305) とした上で、ヴィクトリア朝の振舞のコードについて、「(中産階級以外の)他の階級が憧れるような、また、*respectability* への努力の一つとして組み立てられるような」(Sterns 1994: 305) ものだと述べている。そしてこうしたコードは、「望ましくない自然な感情の解放や、哀しみ (grief)、勇気 (courage)、母性愛 (mother affection) 等の領域における感情の高まりの不十分さ」を「ジャッジ」し、「非難する」ための規範として中産階級自身によって使用されたと分析している (Sterns 1994: 305-6)。つまり、必要な時に感情をおおらかに表現することも、*respectable* なことであったと分析しているのである。

また、*respectability* の差異化としての機能の極端な例は、G. L. Mosse (1986=1995) の研究に見ることが出来る。Mosse はこの概念を、ファシズム下のナチスがユダヤ人を差別するための *distinction* (差異化) として使用したことを明らかにした。ドイツ国民らしい「きちんとした振舞」が規範化され、ユダヤ人たちはそうした振舞をしていない、という風評を流布することにより、ユダヤ人差別を人々の意識に刷り込んでいったのである。「(「まさしくリスクタビリティとナショナリズムが発揮する威力、それが持つ魅力、それが満たす欲求の帰結は、社会的規範の外に身を置く人々すべてへの全面的な有罪宣告であった。」(Mosse 1986=1995: 233))。「ナショナリズムとの密接なつながり」や、「アウトサイダーをステレオタイプ化しそれを医学的に正当化すること」は、「人種主義が優秀人種の特長としてリスクタビリティを主張することを容易にした」のである (Mosse 1986=1995: 238)。

振舞のコードが差異化として機能する有り様は日

本でもみられる。例えば、竹内 (2005, 2003) は明治、大正期の礼儀作法書を調査し、そこに表れる「西洋化」「近代化」を象徴する理想的人間像としての「紳士」という概念に着目した。明治期以来、日本には西洋の礼儀作法書が大量に輸入され、一定の普及を見せた。特に明治後期から大正期にかけて、「社交」をテーマにした、交際術や成功術のような作法書が多く出版されるようになったという (竹内 2003: 11)。そうした中で「紳士」という像が一つの理想像とされたのである。竹内の分析によると、「紳士」は「品位と自制心とを有する穏やかな人格の持ち主であり、専門知識だけではなく広い教養を有しており、テーブルマナーや洋服など、「西洋」の最新の文物や文化に詳しい人間」(竹内 2003: 24) として描かれている。本稿の観点から重要なのは「紳士」という概念の機能である。これについて竹内は、「紳士」なるものとそうでないものを区別する「半可通・気取る・かぶれ」(竹内 2003: 24) や、「似非紳士」(竹内 2005: 745) という語が同時期に頻出したことから、「『西洋的』なるものが『差異化の原理』の一つとして作用」(竹内 2003: 26) していたと分析する。竹内の着目した「紳士」は、本稿の文脈で言えば *respectable* であることであり、ここでも、振舞のコードは、「洗練されている者」が「洗練されていない者」を差異化するという力学として機能していたのである。

以上、振舞のコードが差異化として機能していたことを確認してきた。次に Wouters の論考を中心に、20世紀における振舞のコードの変遷を見ていきたい。

4. 20世紀における振舞のコードの変遷

—Wouters の研究を中心に—

本節では、2節でその重要性を確認した *authenticity* が、感情の社会史研究として代表的な Wouters の仕事からも出てきていることを確認しておきたい。Wouters は、20世紀におけるエチケットブックやマナーブック等の記述の変遷を調査し、

人々の感情制御について「インフォーマル化」(Wouters 2007, 1986等)していると指摘した。

Woutersによると、20世紀を通じて、人々の振舞のコードは(行ったり来たりではあるものの)リジッドではなくなってきたり、その意味では、人々はより自由になっていると指摘する。例えば、20世紀初頭においては、友人や家族に対して、ファーストネームで呼んだり、挨拶のキスをしたりすることは、過度になれなれしく(too familiar)、きちんとした振舞ではないとして忌避されていたが、20世紀半ばになると、それらは許容されるようになってきたという(Wouters 2007: 72-80)。こうしたことが起こる原因は、社会的に劣るとされてきた階層の社会運動や、社会福祉の増大により、異なる社会集団間(階層、性別、世代等)の混交が進み、それぞれの階層からの「解放(emancipation)」と階層間の「統合(integration)」(Wouters 2007: 90)が起きたためだとする(例えば、女性の社会進出が進み、男性に庇護してもらう必要性が薄れたこと等)。すなわち、階層間の区別を示すものとしてのマナーがそれに伴い緩んできたというのである。しかしリジッドなマナーに代わり、人々は新たな統制に直面する。それは、Wouters自身の“The constraint to be unconstrained, at ease, authentic, and natural”(Wouters 2007: 90, 傍点は引用者)という言葉、あるいはEliasが講義中に語ったという「コントロール化された脱コントロール(“controlled decontrolling of emotional controls”)(Wouters 1986: 3)という表現に端的に表れている。つまり、「他者による抑制から自己抑制への転移」(Wouters 2007: 17)が起こっており、そこでは、より自然で、わざとらしくない、こなれた振舞が求められるのである。

ここでも authentic であることの重要性が指摘されている。先のファーストネームや挨拶のキスの例で考えれば、かつては、それらは「ふさわしくない」として単純に考えればよかったが、現代においてはふさわしい場面もあればふさわしくない場面もあり、

それを状況に応じて判断せねばならなくなったということである。「選択のリスク(risk of choice)」が常に発生しており、それを乗り越えるためには、お互いの深い相互理解が必要なのである(Wouters 2007: 84)。このように、固定化された定型的なルール(それらは今では蔑みの対象にすらなっているという(Wouters 2007: 92))が徐々になくなり、相互行為場面における適切さについて各自の裁量が増えるにつれて、人々はより高度な振舞のマネジメントを強いられるようになった、というわけである。

これに対しSternsは、「カジュアルな服装や、性の解放性、ラフな歩き方。これらは確かに、より柔軟な個人のアイデンティティと、リジッドなマナーの欠損を示している。しかし、これらの変化の軌道は、感情的な成熟の規範の発展とは別ルートで起こっている」とし、「インフォーマル化は的を射ていない」(Sterns 1994: 136)と批判する。

表面的な振舞と内的な感情を分けて分析したSternsのこの指摘は注目し値するかのよう思える。しかし、本稿注1)や注8)で述べている通り、Sternsが探求したemotional styleも、手記や手紙、育児指南書等といった形で言語化されたものであり、その意味において「感情表出の仕方」、すなわち「振舞」以上のものではないのである。確かに、SternsとWoutersでは内的な感情の記述に重きを置くか、外的なマナーの在り様に重きを置くかという違いはある。しかし、例えばWoutersが取り上げた「挨拶のキス」という振舞も、「友人への友好」という感情をいかに表現するかという問題であり、その意味において「感情表出の仕方」であり、「振舞」なのである。

また、Sternsの、20世紀においては、あらゆる感情の内的高まりは忌避された、という議論もやや乱暴である。この乱暴さは、おそらく20世紀後半の事情を考慮していないことからくるものと思われる。例えばSternsは、職場における感情の忌避に関して多くの紙面を割いている。Sternsは主にメイヨーの議論に依拠して論を展開し、マネジメントの手法が科

学化され、感情的な高まりは生産性を落とすものとされたという現象を読み取る。また、サービス産業の隆盛により、人間関係の円滑化が至上命題となったことも、感情を抑制する原因として再三強調されている。しかし、Sterns 自身も参照している A. R. Hochschild (1983=2000) の議論を踏まえると、職場の感情については「抑制」「忌避」という一方通行的なものではないということが分かる。ホクシールドが調査したフライトアテンダントは、「自然なスマイル」で乗客をもてなさなければならない。その意味においては、自らのケアの感情をむしろ積極的に表出しているのであり、一方的に忌避しているわけではない (Hochschild が同書で対象にした bill collector に至っては、怒りや恐怖を適切に表出して集金業務を行っている)。また、そもそも「科学的なマネジメント」が至上命題としてきた「動機付け」は、仕事へ向かう感情的な高まりを従業員に抱かせ、望ましいパフォーマンスをあげさせようとするものであったはずである⁹⁾。

このように、Sterns の議論は、少なくとも職場に関するものについては、20世紀後半の事情をうまく捉えきれていない。この意味では、Wouters の“The constraint to be unconstrained, at ease, authentic, and natural”という表現は的を外していないように思われる。続く節では、この authenticity の機能に着目し、respectability のそれと比較することにより、後期近代における振舞のコードの内容とその機能の変容を描き出すことを試みる。

5. コミットメントの共有

—authenticity の機能—

3節で確認したように、respectability は「差異化」として機能した。それに対し、authenticity はどのような機能を持つのだろうか。この点を明らかにすることにより、近代を通じて「振舞のコード」がどのような役割を担ってきたのが明らかになる。そしてそのことは、現代社会において、包摂と排除

の基準となり得る対人関係を取り巻く規範の機制を明らかにすることにつながる。

2節で述べた通り、外的基準の権威が希薄化した近代において人々が頼りにするものが「ほんとうの自分とは何か」「ほんとうに自分が欲するものとは何か」という authenticity であった。鍵となるのは、対人関係における「信頼」の在り様であると本稿は考える。Giddens は、authenticity と信頼は潜在的に結びついていることを指摘するにとどまっておらず (Giddens 1991: 186-7=2005: 211-2)、深くは論じていない。本節では、信頼と authenticity の関係について、これまでみてきた関連研究や、respectability との対比の中からより深く検討していく。

Giddens は、近代においては、「信頼」¹⁰⁾¹¹⁾ が対等な交渉の中から構築されるものになったということを強調する。「私たちは……以前に比べて実質的な面においても、より一層平等になった社会に生きています。対等なものどうしの関係は、……交渉によって取り決められなければなりません。対等なものどうしの関係は、積極的な信頼に依拠しているのです。」(Giddens 1998: 136=2000: 213) そしてこの「信頼」は「自分が何であることを説明できる」という意味で、自己アイデンティティや純粋な関係にとって根本的な要素となっているという。つまり、近代においては、人々は様々な伝統的制度から解放される一方で、それらによる権威付けを失うため、人々や社会と関係を構築する際、「関係性そのもの」が目的であり実質であるような状態に置かれる。そこでは、確かな判断基準を持たず、相手とのやり取りの中で「信頼」を構築していかねばならない。そして、現代を含む後期近代においては、近代の特徴が加速度的に進み、より一層外的基準の足場を失っている。こうした状況で機能するものこそ authenticity なのではないだろうか。つまり、authenticity を通じて、ある事象に、少なくとも同じ程度の深さをもってコミットしているということを互いに確認し合っているのではないかと考えられるのである。同じ程度のコミットメントを確認しては

じめて、相手が時間的、空間的に離れても、自分に不利益をもたらさないような判断や言動を行ってくれるという確証に近づくことができる。なぜなら、今日の前で彼／彼女が見せた振舞は「ほんもの」であるが故に、自分が見ていないところでも同様に表出されると考えることができるからである。すなわち authenticity を通じて、相手の言動の予測可能性を担保していると考えられるのである。このことをもう少し詳論したい。

例えば恋愛関係においては「ほんとうに相手が自分のことを好きかどうか」、職業生活においては「ほんとうにやる気があるかどうか」ということを確認して、自分が見ていないところでの相手の言動を予測する（自分の面前においてのみ「愛している」と言ったり、「頑張ります」と言ったりしていないことへの確証に近づこうとする）。相手が authentic な状態で肯定的な反応を示す場合、自分と同じ程度に本気になってくれているということを確認することができるため、安心することができる。その背景は、前述の通り、後期近代においてはそれ以外に依る辺がないからである。

このことは respectability と対比させることによりクリアになる。先に紹介した竹内の論考にあったように、明治大正期の日本では、西洋的な知識に精通することにより「紳士」として振舞うことが、その人の信頼の源だったのである。当時は「西洋的な知識」という権威があった。しかし現代においてはそれに代わるものがないのである。その代わり、ある商品やサービスが「信頼するに足る」かどうか、あるいは交渉相手が自分に不利な結果をもたらさないか、ホテルの従業員がきちんと仕事をしてくれるかどうかということに対する「信頼」の確証に近づくために、「ある事象に同じ程度のコミットメントをしていること」を表す authenticity が希求されるのである。

つまり、相手が信頼するに足るかの判断基準を模索する態度が、「振舞のコード」のレベルまで表面化し、authenticity への希求という形で表れている

と考えることができる。ただし注意すべきは、相手が authentic な状態で否定的な反応を示す場合、その人は「信頼できない」と判断することになる。従って、「信頼するに足るかどうか」を判断するにあたり、authenticity は必要条件であっても十分条件ではないということである。以上が、外部的権威が希薄化した後期近代において、振舞のコードが respectability から authenticity にウェイトを変容させてきたからくりであると考えられる。

最後に注目すべきは、Giddens が、親密性に集中する純粋な関係性との関連において authenticity やコミットメントを重視していること (Giddens 1991: 96=2005: 108) との関係である。消費や職業生活の文脈における関係性は純粋な関係性ではない (Giddens は、仕事上の付き合いが純粋な関係であるという意味での友人関係であることを否定している。「相手とのきずながその関係自身のために価値をもつ」とはいえないからである (Giddens 1991: 90=2005: 100))。しかし、2節で述べたように、親密圏に限らない対人関係の文脈で authenticity は求められている。実際、後に Giddens 自身も職業生活上のネットワークが親密性の色彩を帯び始めていることを示唆している¹²⁾。この現象を説明する論理こそ「同じ程度にコミットしていることを確認するための authenticity」なのではないだろうか。このように「純粋な関係性」を超えて（というより、後期近代が進む中で、「純粋な関係性」の適用範囲が広がったと解釈する方がよいが）authenticity が価値を持っている状態は、モダニティの原理が加速度的に徹底していく後期近代の帰結であると考えることができる。

6. まとめ

本稿では、「社会的に要求されたものと禁止されたものの標準」であるが故に、対人関係を取り巻く規範を構成する重要な要素である「振舞のコード」に着眼し、その変容を描いてきた。19世紀から20

世紀前半において、振舞のコードは、他の階級への差異化として機能していた。その後、Woutersのいうインフォーマル化が進み、階級からの解放(emancipation)と階級間の統合(integration)が進む。そして後期近代である現代、外部的な権威付けが薄れたために、人々是对等な立場における交渉の中で信頼を構築していくことになる。こうした事情を背景として、今回着目した、人々の振舞のレベルに表れる authenticity は、同じ程度のコミットをしていることの確認として機能し、信頼の手がかりとしての役割を果たしている。これが本稿の結論である。いわば、「君たちとは違う」ということから、それとは対照的に、「あなたと同じです」ということへのウェイトの変容。そしてそれは加速化する後期近代における信頼形成の在り方を媒介としている。

本稿の学術的意義は次の二点である。第一に、Giddens 後期近代論を「振舞」という次元から肉付けたことである。これは、後期近代論の射程を見定めることに貢献する。第二に、感情や振舞に関する研究の整理である。これまで、感情や振舞については、社会史的研究、事例研究、理論的研究が無機的に散在する傾向があったが、本稿は、authenticity という概念を補助線としてそれらを有機的に結び付け、近代における「振舞のコード」を提示したものと位置づけられる。

社会的意義としては、現代の対人関係に起因する病理に関する言説(「同調圧力」や「空気を読むこと」等)を、「信頼構築のための authenticity」という新たな視点から評価することが可能になる点である。

最後に今後の課題を述べておきたい。まず一つは、具体的な場面(例えば家族や職場等)において、authenticity がどのように表れているかということの経年変化を追うことの必要性である。本稿では、関連する先行研究を整理するという手法をとったため、「場面」を揃えて歴史比較を行うという方法は取れなかった。理論的な整理及び仮説の提唱にとどまっており、今後実証的な裏付けが必要である。こ

の点を補うため、例えば、育児指南書やビジネス誌など媒体を限定して集中的に言説を分析することにより、authenticity を読み取っていくことが考えられる。もう一つは、authenticity と respectability の関係である。注意すべきは、現代においても、respectability はその価値を失っていないということである。つまり、「ほんものらしいこと」「自然であること」に「きちんとしている」「卓越している」という印象を抱くという記述の仕方も可能である。これは用語の捉え方の問題でもあるが、authenticity そのものではなく、authenticity らしさ^らが^さ価値を持つという次元において議論を進めてきた本稿では整理しきれなかった問題であるので、今後の課題としたい。

注

- 1) ここで、感情の社会史研究から「振舞のコード」を読み取ることの妥当性について述べておかなければならない。

Sterns 及び Wouters は、両者とも自らを感情の社会史家と名乗っているが、両者のスタンスは微妙に違いがある。Sterns が個人の手記や手紙から「内的な感情」を描こうとしたのに対し、Wouters はマナーブックやエチケットブックを資料として、「振舞」を描こうとした。本稿では、両者とも、「振舞のコード」を扱った者として整理し、感情と振舞の関係については以下の通り考えるものとする。

感情の社会史を描くに当たり、資料とされたものは、手記、手紙、育児指南書(Sterns)、エチケットブック(Wouters)等の言語化されたものである。言語化された時点でそれは「感情表出の仕方」であり、「振舞の仕方」を描いたものなのである。この点は調査の方法論上の制約でもある。Sterns は感情の「intensity」という表現を用いてその内的な側面を記述しようとするが、彼が根拠として提示しているものは、個人の手記や手紙、育児等の指南書、雑誌記事等の言語化された資料であり、その限りにおいて、「感情の表出の仕方」が記述されたもの以上のものではない。

以上のような整理を踏まえ、本稿では Sterns の研究も Wouters の研究も本稿の研究対象である「振舞のコード」を描くものとして参照する。この点については、Sterns による Wouters の批判を検討する箇所でもう一度詳述する (本文 p 7 参照)。

- 2) 「純粋な関係」とは、「社会関係を結ぶというそれだけの目的のために、つまり、互いに相手との結びつきを保つことから得られるもののために社会関係を結び、さらに互いに相手との結びつきを続けたいと思う十分な満足感を互いの関係が生みだしていると思えず限りにおいて関係を続けていく、そうした状況」と定義されている (Giddens 1992: 58=1995: 90)。
- 3) Giddens (1991=2005) においては、「信実性」という訳語があげられているが、理解の便宜のために、本稿では原語の *authenticity* を一貫して使用する。
- 4) この現象について、森 (2000) は「心理主義化」、櫻村 (2003) は「心理学化」と呼ぶ。
- 5) 森 (2011) は、ギデンズの著書 *Modernity and Self-Identity: Self and society in the Late Modern Age* (1991) を、ギデンズ流の「心理主義化社会論」として読めると述べている。
- 6) 牧野 (2012) によると、90年代以降、「脳内革命—脳から出るホルモンが生き方を変える」(春山 1995) 「EQ—こころの知能指数」(Goleman 1995=1996) 等がベストセラーとなり、科学的な知見を用いて自分の「内面を対象技術化」(牧野 2012: 59) し、自分をより良く変えていくことを内容としたものが一般に普及したという。
- 7) 本稿で *authenticity* に着目したきっかけについて簡単に触れておきたい。筆者は、現代日本の職場における振舞のコードを明らかにするために、日本の『プレジデント』誌 (日本で最も人気のあるビジネス雑誌のひとつ) の記事に表象される言説の分析を行った。分析の全体像及び詳細は別稿を準備中であるが、そこで明らかになったことこそ、対人関係における *authenticity* の重要性であった。例えば、上司を説得する場面では「書類よりその人間の熱意、本気度を見る。(2008年8.18号)」, 言いにくいことを伝える場面では「余計なことが書かれると、わざとらしく姑息な感じがする (2012年3.19号)」, 謝る場面では「『すみません』とペコペコ平謝りすればすまされると思っている人は案外少なくありません。『すみません』の安売りは軽蔑的となるだけなのです。言うまでもなく、謝罪は自分がよくないことをしたと正確に認識するところからはじまります。この前提条件があって、はじめて謝罪の言葉に真実味が出てきます。また上司など社内の人に対しても『すみません』を連呼すると口先だけのお調子者か、弱腰の人間だと思われるだけです。(2013年11.18号)」, 褒める場面では「心掛けたいの決してお世辞ではなく、素直な気持ちで伝えることだ。そうした、さりげない会話をバカにしないことが自分の印象をよくする第一歩となる。(2013年12.16号)」(下線は全て引用者) といったように、わざとらしくなく、自然で「ほんもの」の表象が求められているという言説がその特徴の一つとして表れていた。
- 8) Sterns は、日本語でいうところの「感情規範」にあたる “emotional style” という表現を用いるが、注 1) で述べた通り、表現される限りでの emotion を捉えているため、本稿では「振舞のコード」と読み替える。
- 9) 例えば S. C. Bolton は、経営学説史的な観点から、職場における感情がどのように扱われてきたかについて要約をしている (Bolton 2005: 13-43)。彼女の論考によると、ハースバーク、マクレガーらによる、人間関係に焦点をあてた研究において、金銭だけではなく、「満足」も重視した「social man としての労働者」(Bolton 2005: 20) が想定され、感情はモチベーションの重要な要素と位置づけられ、組織の効率性を追求する際の考慮要素となった。
- 10) ギデンズは信頼を「所与の一連の結果や出来事に関して人やシステムを頼りにすることができるという確信」(Giddens 1990: 34=1993: 50) と定義している。また、「他人を信頼できるということは、その人が一連の予測可能な反応をするだろうと当てにできるということである。」(Giddens 1987: 136=1998: 185) とも述べている。
- 11) ギデンズの信頼論はこれまで、貨幣や公共サー

ビス等の抽象的システムに対する信頼を想定した議論が多かった。例えば関口(2004)は、意識して判断しないという意味での盲目的確信という形でギデンズ信頼論を捉えている。それに対し本稿が想定するのは、個人同士の関係形成における信頼である。これについては別様の解釈が必要である。本文中の引用のように、「対等な者同士の関係で積極的な信頼を形成する」という捉え方をギデンズ自身がしており、また、実際の間人関係においても言語化された意識をもとに他者が信用に足るかどうか判断するということが容易に想定されるからである。こうした意味で本稿は、信頼論に対する新たなアプローチを行うという意義もあろう。

- 12) 「ネットワークは、脱伝統遵守が進行する社会において、人々とのつながりを積極的に支える方法となっているからです。人は、ある程度まで、既に確立された役割に引き続き依存することが可能です。しかし、ネットワークとは、他の人々との関係性を積極的に、また率直な仕方、形成することを意味します—ネットワークは、今日、社会生活の他の多くの活動領域においてそうであるように、私が名付けた積極的信頼を必然的に伴っています。ネットワークは、明らかに平等主義であり、したがって、たとえば友情とは明らかに異なるとしても、親密性という言語表現を生じさせているのです。」(Giddens 1998: 120-1=2001: 189-190, 傍点は引用者)

参考文献

- Bolton, Sharon, C, 2005, *Emotion management in the workplace*, New York: Palgrave macmillan.
- Cote, Stephane, Ivona Hideg, and Gerben A. van Kleef, 2013, "The consequences of faking in negotiations," *Journal of Experimental Social Psychology*, Volume 49(3): 453-463.
- Elias, Norbert, 1969, *Über den prozess der Zivilisation Vol.I.* (=1977, 赤井慧爾・中村元保・吉田正勝訳『文明化の過程 I』法政大学出版.)
- Erickson, Rebecca, J., 1995, "The importance of authenticity for self and society," *Symbolic interaction*, 18(2): 121-144.
- Giddens, Anthony, 1987, *Social theory and modern sociology*, Cambridge: Polity Press. (=1998, 藤田弘夫監訳『社会理論と現代社会学』青木書店.)
- , 1990, *The consequences of modernity*, Cambridge: Polity Press. (=1993, 松尾精文・小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か?—モダニティの帰結—』而立書房.)
- , 1991, *Modernity and Self-Identity: Self and society in the Late Modern Age*. Cambridge: Polity Press in association with Basil Blackwell. (=2005, 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ: 後期近代における自己と社会』ハーベスト社.)
- , 1992, *The transformation of intimacy: Sexuality, love, and eroticism*. Cambridge: Polity Press. (=1995, 松尾精文・松川昭子訳『親密性の変容—セクシュアリティ, 愛情, エロティシズム—』而立書房.)
- , 1998, *Conversations with Anthony Giddens: Making sense of modernity*. Redwood city: Stanford University Press. (=2001, 松尾精文訳『ギデンズとの対話—いまの時代を読み解く—』而立書房.)
- Gilmore, James H. and Pine II B. Joseph, 2007, *Authenticity: what consumers really want*. Brighton: Harvard Business Review Press. (=2009, 林正訳『ほんもの—何が企業の「一流」と「二流」を決定的に分けるのか?—』東洋経済.)
- Goffman, Erving, 1963, *Behavior in Public Places: Notes on the social Organization of Gatherings*, New York: The Free Press (=1980, 丸木恵祐・本名信行『集まりの構造 新しい日常行動論を求めて』誠信書房.)
- Grandey, Alicia, A., Glenda M. Fisk, Anna S. Mattila, Karen J. Jansen, and Lori A. Sideman, 2005, "Is service with a smile enough? Authenticity of positive displays during service encounters," *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, Vol.96: 38-55.
- Hochschild, Arlie Russell, 1983, *The managed heart-commercialization of human feeling*, Berkeley: University of California Press (=2000, 石川准・

- 室伏亜希訳『管理される心 感情が商品になるとき』世界思想社.)
- Holden, Daphne and Douglas Schrock, 2009, "Performing authentic selfhood in an intentional community," Phillip Vannini and J. Patrick Williams eds., *Authenticity in Culture, Self, and Society*. New York: Routledge, Chapter 13.
- 樫村愛子, 2003, 『「心理学化する社会」の臨床社会学』世織書房.
- 牧野智和, 2012, 『自己啓発の時代—自己の文化社会学的探求』勁草書房.
- McCarthy, E., Doyle, 2009, "Emotional performances as dramas of authenticity," Phillip Vannini and J. Patrick Williams eds., *Authenticity in Culture, Self, and Society*. New York: Routledge, Chapter 15.
- 森真一, 2000, 『自己コントロールの檻』講談社選書メチエ.
- , 2011, 「心理主義化社会のニヒリズム」『社会学評論』61(4): 404-421.
- Mosse, George, L., 1985, *Nationalism and Sexuality: Middle-class morality and social norms in modern Europe*. New York: Howord Fertig. (=1996, 佐藤卓己・佐藤八寿子訳『ナショナリズムとセクシュアリティ—市民道徳とナチズム』柏書房.)
- Noy, Chaim, 2009, "Embodying ideologies in tourism: A commemorative visitor book in Israel as a site of authenticity," Phillip Vannini and J. Patrick Williams eds., *Authenticity in Culture, Self, and Society*. New York: Routledge, Chapter 14.
- Osborne, M. & C. Benedikt, 2013, *The future of employment: How susceptible are jobs to computerization?*, Oxford: Oxford Martin Programme on Technology and Employment
- 佐藤八寿子, 1998, 「リスペクタビリティとは何か」『教育・社会・文化：研究紀要』5: 75-84.
- 関口俊之, 2004, 「信頼論の占める位置—ギデンズの信頼概念をめぐる—」『現代社会学理論研究』14: 86-101.
- Stearns. Peter, N., 1994, *American cool*, New York: New York university press.
- 竹内里欧, 2003, 「『紳士』という理想像の誕生と展開：近代日本の礼儀作法書にみる」『京都社会学年報』11: 13-28.
- , 2005, 「『真の紳士』と『似非紳士』—『西洋』と『日本』の構築—」『社会学評論』56(3): 745-759.
- Trilling, Lionel, 1971, *Sincerity and Authenticity*, Cambridge: Harvard University Press. (=1989, 野島秀勝訳『〈誠実〉と〈ほんもの〉』法政大学出版会.)
- Wouters, Cas, 1986, "Formalization and informalization changing tension balances in Civilizing Processes," *Theory, Culture & Society*, 3(2): 1-18.
- , 2007, *Informalization Manners & Emotions since 1890*, London: SAGE Publication

Research Note

Considering Giddens' Late Modernity from the Viewpoint of Behavior : About "authenticity" as a Code of Behavior

TANIHARA Tsukasaⁱ

Abstract : Looking ahead to the future, where tact as applied to interpersonal relationships will function more strongly in determining inclusion and exclusion in society, it is our immediate task to delineate the norm of interpersonal relationships and to reveal "what is going on?" This paper links Anthony Giddens's theory of late modernity with the social history of emotions and approaches the mechanism of the norm of interpersonal relationships. In this paper, code of behavior as "the standard of what society demands and prohibits" (N. Elias 1969=1977: 59) is set as a viewpoint. Giddens mentions "authenticity" (Giddens 1991) as a moral value in late modernity.

Based on this concept, firstly, by reviewing previous relevant researches this paper points out that the value of authenticity has been increased. Secondly, based on researches on the history of emotions, this paper analyzes respectability as the predominant code of the 19th century, and then shows how the code of behavior has changed throughout the 20th century, based on Wouters' theory of "Informalization" (Wouters 2007). According to Wouters, the code of behavior has been "unconstrained, at ease, authentic, and natural" (Wouters 2007: 90). Thirdly, in order to delineate the change of code of behavior throughout modernity, this paper compares the function of authenticity with that of respectability. The key concept is trust in Giddens's theory of late modernity. Specifically, while respectability has functioned as a distinction, authenticity functions as a confirmation of commitment and we use it when we judge whether or not we can trust others. In conclusion, this paper points out the change of norm of interpersonal relationships, from distinction to confirmation of commitment.

Keywords : theory of late modernity, code of behavior, respectability, authenticity, trust

i Master's Program, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University